

手話劇 曾根崎心中、破！

人形

平野屋 徳兵衛

天満屋 お初

油屋 九平治

人形遣い

南 宗輔（徳兵衛遣い）

吉田 フミ（お初遣い）

近田 半二（九平治遣い）

太夫（語り）

豊田 和香（太夫1）

加賀 譲治（太夫2）

武本 義江（太夫3）

タキちゃん（こども太夫1）

スミちゃん（こども太夫2）

※太夫のセリフの【かつこ】は、こども太夫が復唱する。

序（1・1） 「曾根崎心中」 ～生玉神社～

三味線にあわせて、太夫1とこども登場

太夫1 時は元禄、江戸時代【江戸時代】

ところは大坂、商いの町【商いの町】

茶屋で休んでいる徳兵衛

太夫1 神社の茶屋で休んでいるのは、

醤油屋に勤める二十五歳の若者、平野屋の徳兵衛【徳兵衛】

お初、駕籠（かご）から降り登場

太夫1 そして駕籠から降りたのが、

十九歳のうら若き遊女、天満屋のお初【お初】

今日一日、お客と一緒に大坂三十三の観音廻りを終えた帰り道。

お初 そこにおけるのは、徳兵衛さまかい？

徳兵衛 お初やないか。なんで、ここへ？

お初 （手を取り）ああ徳兵衛さま、いったい今までどこにおったの？

なんで顔を見せてくれへんの？

私はもう心配で心配で、この身が病んでしまいそう。

嘘だと思ふなら、ほら、胸のつかえを見てください。（胸をさわらせる）

徳兵衛 （慌てて手を離し）おお、すまなんだ、すまなんだ。

ほんまは今日まで色々大変やったが心配をかけまいと黙っておったのだ。

お初 ひどい、なんで言うて下さらんの。あんまりや。

私はもう心配で心配で、この身が病んでしまいそう。

嘘だと思ふなら、ほら（また胸をさわらせる）

徳兵衛 わかった、わかったから！

お初 ほんなら（話してください）

徳兵衛 うむ、どこから話そうか

太夫 1

徳兵衛が語ったところによると、徳兵衛は店の主人から姪っ子との縁談を持ちかけられ、さらに田舎の養母が勝手にそれを承諾し、すでに持参金まで受け取ってしまった。ということ。

お初

なら、徳兵衛さまはもうその方と夫婦に・・・？

徳兵衛

いや、俺はお前という決めた女子がおる。もちろん縁談は断った。

太夫 1

そうして、田舎の養母の元へ急いで帰り、なんとか話をつけて持参金を取り返してきた。と、いうことであつた。

お初

私を思うて縁談を断ってくれたんはうれしいけど。大丈夫なんか？

徳兵衛

いや、旦那さんはいそう怒つて、俺を店から追い出し、二度と大阪の地を踏ませんと言うとる。けど俺にも男の意地ちゆうもんがある。追い出されるんも承知の上や。ともかく、後は金を返せば片がつく。

お初

ああ、私のためにそんな大変なこと。うれしく、悲しく、かたじけなく思います。せやけど、お気持ちをしっかりとお持ちになつて。例え大阪を追い出されても何とでもなりましょう。この世がダメなら、あの世で一緒にする方法もあると聞きます。ともかく、早くお金を返して。

3

徳兵衛

そうしたいんやが、実は昨日、旧友の九平治に急ぎで一日だけ金を貸してほしいちゆうてたのまれて、他ならぬ友のたのみ、その金を貸したんや。今日には返してくれるはず。おお、うわさをすれば。

九平治、酔つて、陽気に歌いながら登場

九平治

山寺のゝ春の夕暮れゝ来てみればゝ

徳兵衛

おい、九平治

九平治

おお、これは徳兵衛、久しぶりやな

徳兵衛

昨日金を借りという、久しぶりやなからう

九平治

金？何のことや？

徳兵衛

何を言うておる？俺が昨日お前に貸した金や

九平治 わしが、お前から？何を寝ぼけたことを

徳兵衛 それは、こっちのセリフや。昨日の今日。忘れたとは言わせへん。
それに念のために、ほれ、借用書も残したやないか。

徳兵衛 懷から借用書を取り出し、九平治に渡す。

九平治 おお、これは、確かにわしの判。けど、これは先月失くした古い判や。
見つからんので、わしはすでに新しい判に変えて、届けも済んでおるわ。
さてはお前、拾うたわしの判で偽の借用書作って、わしから
金をとろうっちゅう考えか！（借用書を地面にたたき捨てる）

徳兵衛 なんやと！ おのれ九平治、仕組んだな！
騙されたのは俺のほうや。俺の金をかえさんか！

九平治 何をしゃらくさい。

徳兵衛と九平治、取っ組み合い。

お初 あれ、誰か、誰か。

太夫 1 と、そこへお初の客を乗せた駕籠がやってきた

駕籠がきて、お初が無理やり乗せられる。

お初 あ、まっってお客はん、あれは私の知ったお方、平野屋の徳兵衛さまです。

お初、駕籠に乗せられ退場。徳兵衛、九平治に投げ飛ばされる。

九平治 （まわりに）おい、みんな。この男は、こんな偽の借用書をつくって、
友人から金を巻き上げようとした、大罪人や。本来なら奉行所に
突き出すところ、これまでの付き合いに免じて許してやるわい。

九平治、笑いながら退場

徳兵衛 待て、おい。（まわりに）違う、俺ではない。俺は騙したりしとらん。
（しかし誰にも信じてもらえず）ああ、無念じゃ、無念じゃああ。

徳兵衛、悔し涙を流しながら退場

序（1・2） 「曾根崎心中」 ～天満屋～

太夫 2

その夜のこと。【夜のこと】

ここは恋に恋する人々の、気持ちが行く流れる蜷（しじみ）川。【しじみ川】
その川のほとりにあるのが、お初めの働く天満屋。【天満屋】

店に戻ったお初めは、昼間のことが気にかかり、夜の仕事も手につかず、
一人、部屋の隅でふさぎこんでいたところ、

聞こえてくるのは、お客の話す徳兵衛の悪い噂ばかり。

「殴られ蹴られて死になさった」とか「人を騙して縛られた」とか

お初

ああ、もう言わんというて。聞けば聞くほど胸が痛む。

店の表に編み笠を被った徳兵衛の忍び姿。

お初、これを見つけて

お初

（あたりを見回し、わざと聞こえるように独り言）

ああ、気が晴れへん。外の風にあたってこよう。

お初、外へ出て徳兵衛に近付き

お初

徳兵衛さま！大丈夫なん？色々な噂を聞いて、心配で心配で。

徳兵衛

世間がうわさするとおり。九平治に騙され、俺はすっかり悪者扱い。

言い訳をすればするほど、立場が悪うなっていく。

俺は・・・もう、覚悟を決めた。

お初

（驚いて）待つて。（あたりを見て）ここではゆっくり話もできません。

ここは私の言うとおりに。

お初、徳兵衛を着物の裾に隠し入れ、店に戻り、

そつと縁の下に徳兵衛を隠し、何食わぬ顔で縁側に座りこむ。

そこへ、九平治登場。

九平治

やあやあ、これは、今日はお客がえろう少ないですなあ。

やあ、亭主、久しぶりやな。徳兵衛は来とらんか？

ええか、やつは偽の借書をつくって、わしから金を巻き上げようとした
大罪人や。今夜やつがここへきても店に上げる必要はないで。

縁の下では、徳兵衛が悔しさに身を震わせ、今にも出ていこうとするのを、
お初めが必死に足で押さえている。

お初

（独り言のように）ああ、徳兵衛さまと私とは心深くわかりあった仲。あの人がそんなことするはずがない。そんなことはわかっています。けどあの人のことや、嘘を嘘と言いつても、証拠がないんで言えずにおるんや。世間に女々しく言い訳をするんが何よりも嫌いなお方やもの。もしかしたらあの方は、死ぬ覚悟をなさっているんかしら。

お初、独り言と思わせて、足で徳兵衛に尋ねる。徳兵衛もお初の足を自分の喉にあてて、自害する覚悟を伝える。

お初

やっぱり、あの方は死ぬ覚悟に違いない。

九平治

徳兵衛が死ぬものか。やつにそんな度胸はない。まあ、もし死んだら、代わりにわしがお前をかわいがってやろう。

お初

これはありがたいことでございます。その時はあなたも殺すが、よろしいか？

九平治

な、なに？

お初

ああだけど、徳兵衛さまと離れては、一時でも生きてはいられません。徳兵衛さまが死ぬるなら、私も一緒に死にますわ。

九平治

なんだか居心地が悪うなっちゃった。別の店で飲み直しや。こんな店、二度と来るか。

九平治退場。

お初

旦那さん、おかみさん、今夜は私が最後、戸締りをしてあげますんで、どうぞ、先におあがりください。皆様、お休みなさいませ。

お初、礼をする

序（1・3） 「曾根崎心中」 ～曾根崎の森～

太夫 3 しんと鎮まる午前二時【午前二時】

物音ひとつせぬように、店の扉をそろそろと開けて、
外へ飛び出す影ふたつ。【影ふたつ】

お初、徳兵衛の手をとり、登場。

お初 （徳兵衛と顔を見合わせ） ああ、うれしい！

太夫 3 ああうれしいと、死にゆく身を喜ぶ、哀れさよ。【哀れさよ】

手を取り合って進む道、草も木も空も、この世の最後と見上げると、
雲も無心に流れ、水の音も無心に響いてくる。

お初と徳兵衛、手を取り、時に見つめあいながら、道を進む

太夫 3 この夜ばかりは長くあつてと願えども、無常に短い夏の夜。【夏の夜】
死をせまるように鳴く鳥の声。【鳥の声】（こども鳥の鳴き声）

徳兵衛 （空を見上げ） ああ、夜が明けてしまう。その前に曾根崎の森で死のう。

太夫 3 そういつて、たどり着いた曾根崎の森【曾根崎の森】

徳兵衛 （一本の木の前で） さあ、ここにしよう。

お初 ああ、ひと所で一緒に死ねるなんて、こんなうれしいことはないわ。

徳兵衛 死ぬ時の苦しみで、死に姿が見苦しい言われては無念や。
この木に体をしっかりと結び付け、美しく死のうやないか。

お初 ええ、そうしましょう。

帯を取り、剃刀で2つに割く

お初 帯は割けても、あなたと私の間は決して割けへんわ。

二人、お互いを木にしつかりと締め付け座り込む

徳兵衛 よう締まったか？

お初 はい、締めました。

お互いの姿を見て、涙を流す。

お初 いつまでも、こうしていても仕方のない事。早く、早く、殺して。

徳兵衛 承知した。

徳兵衛、脇差を抜き、お初へ向ける。しかし、手が震え、目もくらみ、2度3度と、切っ先の狙いがはずれる。

お初 あ

一声だけあげたお初の喉に刃が通る。じつと徳兵衛を見つめ、そのまま事切れる。

徳兵衛 自分も遅れをとるものか。一緒に行くと約束したんや。

徳兵衛、脇差を自分の喉に突き立てる。そのまま絶え果てる。

太夫3 こうして曾根崎の森の下、命を絶った二人の姿は、
誰が告げるともなく風にのつてうわさが広まり、
これより先の多くの人の、恋の手本となりました。

太夫3、観客に深々と礼をする。

破（2・1） 本番後、楽屋にて

本番後の舞台裏、各々後片付けをしている。
袖から義江登場、フミがそのあとを追い駆け込んでくる。

フミ 待ってください。どういことですか。

義江 しつこい。何回言わせるの。明日でうちは終わり。わかった？

フミ そんな、突然過ぎます。

義江 突然？前から何度何度も言ってるはずよ。

フミ でも、この前聞いた時には、もう一回交渉してみるって

義江 交渉はした。でも無駄。まったく聞く耳を持たない。

フミ そんな・・・

半二 まあ、この客入りじゃあなあ

フミ え？

半二 今日も見ただろ、ガラガラの客席。

来てるお客も、（客席を指さし）爺さん、婆さん、爺さん、婆さん、爺さん・・・っぽい婆さん。あそこのお客なんてずーっと寝てたし。
（おどけて）太夫の声が、あ、ちやうど眠気をさそうのかゝ
（太夫達の視線に）あ、ま、それは冗談として。

宗輔 正式に決まったんですか？

義江 ええ、売上げが限界を下回ったため、助成金は今年で打ち切り、だと。
最後はボロカスに言われたわ。

悔しいけどさすがに助成金なしじゃ、うちは続けていけない。
だから明日の千秋楽が、うちの最後の公演よ。

フミ 義江さんは、それで納得してるんですか・・・

義江 納得？

色々考えて、最後は私が承諾したの。文句がある？

フミ ……いえ……

半二 やっぱり今時の若者には流行らないんだよ。
テレビ、映画、ゲーム、ユーチューブ。そりゃ勝てないって。

フミ ……だったら私達もそれに負けないような、新しい事を試してみたら。

半二 は？新しい事？なんだよそれ。

フミ だから……例えば、太夫さんがずっと座ってるんじゃないかって、
立ち上がってアクションしちゃうとか

和香 あ、それ面白い！

譲治 アホか！お前は早よ明日の準備せえ！

和香 すみません！

宗輔 フミちゃんも、人形の手入れがまだ

フミ ……今更、そんなことしたって……明日で終わりなのに

義江 フミ！何だその態度は？

いいか？例え明日が最後でも、今日と全く変わらない舞台を作り上げる。
それが伝統。その努力が今までの歴史を作ってきた。
中途半端な気持ちなら、明日の舞台にはあがるな！

フミ すみません……

義江 半二、教育が足りてないんじゃないの？

半二 ええ？いやあ……そんなことは……ははは

義江 まあいいわ。そういうことだから、明日もよろしく。

全員 はい。

義江、退場。
各々、準備にもどる。一人動かないフミ。

半二 おい、手を動かせ。

宗輔 ……フミちゃん？

フミ (半二や宗輔の言葉は耳に入らず)

でも……やっぱり……明日で終わりなんて……
和香ちゃんだってそうでしょ。せつかく譲治さんに色々教えてもらって
ようやく一人で舞台に立てるようになったのに。

和香 本当よ。憧れだった太夫にようやくなれた……って思ってたのに……

フミ だったら、諦めないで何とかしない？義江さんがダメなら、私達だけでも

譲治 おい！くだらないことを考えるな。

フミ ……だって……

黒子1、2、こども(タキちゃん・スミちゃん) 登場

タキちゃん ねえ、誰かあそぼー

黒子1 こら、じゃましないのよ。

半二 よーし、俺が遊んでやらあ

タキちゃん ええ、半二さん、飽きた

スミちゃん あれ、フミちゃん、泣いてる？どうしたの？

フミ ううん、大丈夫……

タキちゃん 譲治おじさん、遊ぼうよー

譲治 ……はい

譲治、こどもをつれて退場

和香 知ってました？譲治さん、若いときに、劇団が二つに割れて、

義江さん達とは別のグループにいた頃があったみたいで。

黒子 1 あ、私もきいたことある。方向性の違いか何かで対立したって。

黒子 2 ただでさえ少ない団員が半分ずつになって、大変だったって。

和香 あんなつらい思いは二度としたくないって言っていました。
長い間続けてると、色々ありますよね。
ああ、やっぱり、伝統を続けるって、難しいなあ……。
じゃあ、私、もう少し明日の稽古してから帰ります。

和香退場。黒子達も退場。

半二 ふたりも、次の仕事探しといたほうがいいぜ。

おれはもう就職活動はじめてっから。

フミ 半二さんは……。いいの？

半二 いいも、悪いも、仕方ないだろう。形あるものはいつか終わるってね。
あーあ、でも結局俺は、最後の公演も悪者役か。
たまには、正義の味方もやってみたけどなあ。

半二退場

宗輔 さ、俺たちも帰ろう。

フミ ……なんで、みんなこんなにあっさり受け入れられるの？

宗輔 ……あっさり？
……それは……。違うんじゃない？

フミ え？

宗輔 みんな、それぞれ、……。きっと、色々思ってるよ。
ここまで続けて来たんだから、そんな単純なもんじゃないでしょ。

フミ ……どうすればいいの？

宗輔 （首を振る）……。それが分からないから、みんな受け入れてるんだよ。

宗輔退場。フミ、しばらく立ちすくむが、やがて明かりを消し退場。

序（２・２） 人形だけが残る、深夜の楽屋

誰もいなくなった楽屋。

真つ暗な部屋に三体の人形だけが、上半身を起こした形で並べられている。
しばしの静寂の後、お初人形の腕だけがゆっくりと動きだす

お初 ね．．．え．．．

徳兵衛 ．．．．．

お初 ねえ．．．

徳兵衛 ．．．なんや？

お初 きいた？

あしたで．．．最後って．．．

徳兵衛 ．．．ああ

お初 ．．．徳兵衛さまと．．．いつしよにいられるのも．．．

あしたが．．．最後に．．．なるかも．．．

徳兵衛 ．．．そうやなあ

しばしの静寂。やがてお初のすすり泣く声。

徳兵衛 ．．．お初？

お初 ．．．うち．．．もう．．．死ぬんは．．．いやや。

いつも．．．せつかく徳兵衛さまと

いつしよになれるのに．．．さいごは．．．死んで．．．おわり．．．

昨日も．．．今日も．．．明日も．．．

ずーっと．．．さいごは．．．死んで．．．おわり

．．．もう．．．そんなんは．．．いや

徳兵衛 ．．．仕方ない．．．そういうお話や．．．

お初 ．．．うちは．．．生きて．．．徳兵衛さまと、いつしよになりたい

徳兵衛 ．．．それは．．．無理や．．．

お初 …… うちらで …… かえられへん？

徳兵衛 え？

お初 うちらで …… お話を …… かえるん

徳兵衛 …… おれらは …… 人形や ……

人間に …… あやつられんと …… なんもできん ……

またしばしの静寂。

お初の足が、ゆつくりと動き出す

お初 …… できんと思うから …… できん

徳兵衛 お初 …… ？

お初 できると思えば …… できる ……
はっ！

お初、ゆつくりと足をたてて、ふんばり、立ち上がる

徳兵衛 た …… 立った！！

お初が …… 立ったああああ

お初 しー……。

な、できると思えば …… できる。

…… さあつ。(徳兵衛をうながす)

徳兵衛 (え、俺？)

お初 (さあ、さあ)

徳兵衛、お初を真似てゆつくりと立ち上がるが、よろけてしまう。

お初 ふふ …… からだ …… 重たいやろ？

いっつも人に、あやつられとるから、自分の重さも、忘れてしまう。

お初、足を開き、大きく四股を踏む

お初 しっかり地に足つけて、自分を支えるんや。

徳兵衛、足をふんばり、ゆつくりと立ち上がる。

徳兵衛 おお、立った！立ったぞおおお！

お初 はい、立ちました。

徳兵衛 ・ ・ ・ お初

お初 ・ ・ ・ 徳兵衛さま

二人、かけよって抱き合おうとするが、足が動かない

徳兵衛 ああ、歩けん

お初 ようやく立てたところですから ・ ・ ・ 無理したら、あきません。

二人、見つめあい、うなずき、ゆつくりと座る。

お初 徳兵衛さまは、できん言うたけど ・ ・ ・

明日、うちは、うちで、悔いの残らんよう ・ ・ ・ やってみます。
ほな、また明日 ・ ・ ・ おやすみなさい。

徳兵衛 ・ ・ ・ おやすみ

二人、再び動かなくなる

九平治 はっ ・ ・ ・ ・ ・

急（3・1） 「曾根崎心中 千秋楽」 ～生玉神社～

太夫1 時は元禄、江戸時代【江戸時代】

ところは大坂、商いの町【商いの町】

茶屋で休んでいる徳兵衛

太夫1 神社の茶屋で休んでいるのは、

醤油屋に勤める二十五歳の若者、平野屋の徳兵衛【徳兵衛】

お初、駕籠（かご）から降り登場

太夫1 そして駕籠から降りたのが、

十九歳のうら若き遊女、天満屋のお初【お初】
今日一日・・・

お初 （太夫をセリフを遮り勢いよく）そこにおるんは、徳兵衛さまかい？

太夫1 え・・・

一瞬舞台上が固まる

太夫1 （フミを睨み小声で）早いって

フミ （混乱して）え、ちがう、ちがう

徳兵衛 （慌てて立ち上がり）お初。お初やないか。なんで、ここへ？

お初 （手を取り）ああ徳兵衛さま、いったい今までどこにおったの？
なんで顔を見せてくれへんの？

うちはもう心配で心配で、この身が病んでしまいそう。
嘘だと思ふなら、ほら、胸のつかえを見てください。（胸を触らせる）

徳兵衛 （慌てて手を離そうとするがはなれない）おお、すまな・・・あれ？

宗輔、無理やり徳兵衛の体を離す。

が、お初人形、それに走り寄っていく。フミもお初に引っ張られる。

お初 （徳兵衛の手をとり）いやや、離れとうない。

宗輔、台本にないセリフに驚きフミの顔を見る。
フミ、訳が分からず首を振る。

太夫1 （小声で）ちよつと！何やってるの！

フミ 違う、人形が勝手に。

太夫1 勝手に？そんなわけないでしょ！
（客を気にして、宗輔に）続けて！

徳兵衛 あ．．．（気を取り直して）うむ、どこから話そうか

太夫1 徳兵衛が語ったところによると．．．

お初 知ってます。旦那さんから縁談を持ち掛けられ、お母様がお金を
受け取ってしもうたから、それを取り返しに行つとったんでしょ？

太夫1 わたしのセリフ！

宗輔 フミちゃん、何で．．．

フミ 違う、違うの．．．

お初 （人形主導で無理やり続く）
なら、徳兵衛さまはもうその方と夫婦に．．．？

徳兵衛 いいや、俺はお前という決めた女子がおる。もちろん縁談は断つた。

太夫1 そうして受け取っ．．．

お初 （太夫1を遮って）ああ、うれしい！！

太夫1 セリフを言わせて．．．

お初 ．．．．．ねえ、もう一度言うて

徳兵衛 え？

フミの抵抗をよそに、お初はじつと徳兵衛を見つめ、言葉を待っている

徳兵衛

（仕方なく）もう一回言うで。

俺はお前という決めた女子がおる。もちろん縁談は断った。

お初

（うつとりして）ああ、さすが徳兵衛さま！

見つめあう、お初と徳兵衛

しばし沈黙

太夫 1

ああ、もう、わけわからん——。九平治出て——。

九平治、あわてて登場

九平治

山寺のく春の夕暮れく来てみればく

徳兵衛

おい、九平治

お初

九平治さん、早うお金を返してください

九平治

（驚いて）え・・・金？ な、何のことや？

お初

あんたが、昨日徳兵衛さまから借りたお金です。

（徳兵衛に）ですよね？

九平治

わしが、お前から？何を寝ぼけたことを

徳兵衛

それは、こっちのセリフや。昨日の今日。忘れたとは言わせん。それに念のために、ほら、借用書も残したやないか。

徳兵衛、懷から借用書を取り出し、九平治に渡そうとする

お初

あ、それはあかん！

お初、借用書を無理やり奪い、内容を確認する

お初

九平治さん、この判子、仕組んだでしょ！

お初、借用書をビリビリと破る。

徳兵衛

お初、何をする！

そのまま破った紙を撒く

お初

あら、きれいやわ、花びらみたい。
これで証拠はありません。徳兵衛さまを借用書偽造で訴えることは
できません。

固まる舞台。

お初

太夫、セリフ！

太夫 1

え・・・私？？・・・えっと、そこへお初の客を乗せた駕籠がやってきた

お初

（遠くの駕籠に）え、お客はん、あ、待って、待って

慌てて駕籠が登場。お初、強引に駕籠に乗り退場

半二

（宗輔に）どういことだよ。

宗輔

（首を振る）

半二

さては、フミのやつ。今日でうちが終わるのが納得いかねえから、
最後はもう舞台を無茶苦茶にしてやろうって考えか。

宗輔

まさか、フミちゃんがそんなこと・・・

半二

大丈夫、俺がちゃんと止めてやるよ。
さあ、とりあえずこの場は終わらすぞ。

九平治

（まわりに）おい、みんな。この男は、こんな偽の借用書をつくって、
友人から金を巻き上げようとした、大罪人や。本来なら奉行所に
突き出すところ、これまでの付き合いに免じて許してやるわい。

九平治、笑いながら退場

徳兵衛

待て、おい。（まわりに）違う、俺ではない。俺は騙したりしとらん。
ああ、無念じゃ、無念じゃああ。

急(3・2) 「曾根崎心中 千秋楽」 天満屋

太夫2 その夜のこと。【夜のこと】

ここは恋に恋する人々の、気持ちが流れる蜷(しじみ)川。【しじみ川】
その川のほとりにあるのが、お初の働く天満屋。【天満屋】
店に戻ったお初は、昼間のことが気にかかり、夜の仕事も手につかず、
一人、部屋の隅でふさぎこんでいたところ、
聞こえてくるのは、お客の話す徳兵衛の悪い噂ばかり。
「殴られ蹴られて死になさった」とか「人を騙して縛られた」とか

お初のセリフだが、無言。太夫2、困って何度か振ってみる

太夫2 ……とか……とか

お初 ああ、結局いつもとおんなじ場面。やっぱりお話は変えらへんの？

またも台本と違うセリフをいうお初を、驚きの目で見つめるフミ。
店の表に編み笠を被った徳兵衛の忍び姿。お初、これを見つけて

お初 (あたりを見回し、わざと聞こえるように独り言)

ああ、気が晴れへん。外の風にあたってこよう。

お初、外へ出て徳兵衛に近付き

お初 徳兵衛さま！このままやと、またいつもと同じ。一体どうすれば…。

徳兵衛 世間がうわさするとおり。九平治に騙されて、俺はすっかり悪者扱い。

言い訳をすればするほど、立場が悪うなっていく。

俺は…もう、覚悟を決めた。

お初 待って！なんで…なんで、いつもと同じことを言うん！？

なんで、「覚悟」だなんて、そんなことを言うん！？

それじゃあ、今日も死んで終わりや。

今日変えんと…もう、後がないんよ！ 今日変えんと！

思わず大きな声を出し、口を押えるフミ

宗輔 フミちゃん、落ち着いて。悔しい気持ちはわかるけど。

フミ (首を横に振り) ちがうの…本当に…人形が…勝手に…

・・・でも・・・お初は・・・今日、何かを変えようとしてる？
何かを・・・

話が進まないの、九平治が無理やり登場
お初、あわてて、徳兵衛を着物の裾に隠し入れ、無理やり店に駆け込み
そのままの勢いで縁の下に徳兵衛を隠す。

九平治

やあやあ、これは、今日はお客がえろう少ないですなあ。
やあ、亭主、久しぶりやな。徳兵衛は来とらんか？
ええか、やつは偽の借書をつくって、わしから金を巻き上げようとした
大罪人や。今夜やつがここへきても店に挙げる必要はないで。

縁の下では、徳兵衛が変な体勢のまま、動かないように我慢している。
時々動くをお初が必死に足で押さえている。

お初

（独り言のように）ああ、徳兵衛さまとうちとは心深くわかりあった仲。
あの人があることとするはずはない。そんなことはわかっています。
けどあの人のことや、嘘を嘘と言いつても、証拠がないんで言えずに
おるんや。世間に女々しく言い訳するんが何よりも嫌いなお方やもの。
もしかしたらあの方は、死ぬ覚悟をなさっているんかしら。

徳兵衛、お初の足を自分の喉にあてて、自害する覚悟を伝えようとするのを、
お初、足を振り上げ

お初

なーんて。あの方に限ってそんなことはありません。

九平治

は？

お初

今回は死にません。あの人も、うちも！

半二

馬鹿な。心中話だぞ。心中で人が死なないなんて、そんなことあるか。

お初

・・・心中は・・・心の中を見せること・・・
徳兵衛さまを愛しとる・・・この気持ちをこの身をもって示すこと。
せやから、うちは、決して徳兵衛さまを死なせたりせえへん。
これからはずっーと、うちは徳兵衛さまと、笑うて、泣いて、年取って、
生きて、生きて、生きていくんや。
あの人のためなら、うちはどんな困難にも立ち向こうて見せる。
できひんこともやってみせる。
・・・それが、私の心中立てや。

九平治

なんだか居心地が悪うなっちゃった。
別の店で飲み直しや。こんな店、二度と来るか。

半二

(去り際に振り返り) いいか。お前がどんなに無茶苦茶にしようと、
話はこのまま最後まで進む。曾根崎の森で二人が死んで終わり。
それで、うちの劇団も・・・終わりだ。

フミ

・・・終わりたいくない

半二

・・・あきらめろ

九平治、半二退場。

お初、じっとフミを見つめている。フミ、その視線に気付き、お初を見つめ返す。

お初

できんと思うから・・・できん。

フミ

え・・・あ

お初、退場。フミもそれに引つ張られ退場。

取り残された徳兵衛、困る宗輔をよそにゆつくりと動き出す。

宗輔

え、ちょ・・・

徳兵衛

はっ！(と気合を入れ立ち上がる)
(お初が退場したほうを見て) おはっ・・・

徳兵衛も退場。宗輔もそれに引つ張られ退場。

太夫2

(誰もいなくなり) えええ！？
(困って咳払い)

ええ・・・

二人の運命や、いかに！！！！

太夫2、お辞儀をして強引に場を締める。

急（3・3） 「曾根崎心中 千秋楽」 ～曾根崎の森～

太夫3 しんと鎮まる午前二時【午前二時】

物音ひとつせぬように、店の扉をそろそろと開けて、
（ドタドタと大きな物音。太夫3、顔をしかめて）
外へ飛び出す影ふたつ。【影ふたつ】

ドタバタと、お初、徳兵衛、登場。

どちらも人形が主体的に動き、フミと宗輔はそれに引つ張られている。

徳兵衛 ほら、歩いてるでー。どうや、歩いてやろー？

お初 はい、しっかり歩いてます。

徳兵衛 これで、もうどこでも行ける。お初と一緒にどこへでも。

お初 （徳兵衛と顔を見合わせ）ああ、うれしい！

宗輔 一体どうなってるんだ。全然いうこと聞かない

フミ まるで生きてるみたい

太夫3 （怒りが頂点に達し）いい加減にしろ！フミだけじゃなくて、宗輔もか！
お前らのせいで、千秋楽がめちやくちやだ。

宗輔 違うんです。本当に人形が勝手に！

太夫3 そんなに、私が決めたことが氣にくわないのか？
でもいくら文句を言ったところで、もう仕方ないんだよ。そうだろう。

宗輔 ……はい……わかってます……でも

太夫3 なんだ？

宗輔 いえ……

太夫3 フミは？文句があるなら言ってみろ！

フミ （何も言えず、ただ悔しさをかみしめる）

太夫 3

（ため息）ともかく、今は、この舞台に集中するんだ。
（太夫セリフに戻る）

ああうれしいと、死にゆく身を喜ぶ、哀れさよ。【哀れさよ】

お初

（太夫 3 を見つめ）残念やけど、うちも、徳兵衛さまも死にません。

太夫 3

だから！

徳兵衛

なあお初・・・ずっと考えとったんやけど・・・、
俺は、いまや罪人の汚名を着せられた身。

この先どこへ逃げたとしても、まともな暮らしなんぞできへん。
せやから・・・やっぱり・・・ここは、潔く死んだ方が

お初

徳兵衛さま・・・？

フミ、気持ちが耐えられず人形を投げ出し、うずくまる

宗輔

（フミにかけより）フミちゃん、気持ちはわかるよ。
俺だっここが無くなるのはつらい。でも、仕方がない、そうだろう？
だったらせめて、今日、最後、綺麗に終わりを迎えよう。

徳兵衛

曾根崎の森で二人、美しう最後を迎えて終わり。それでええ。

お初・フミ

（声を張って）はああ？美しく？最後を迎えて？終わり？？
そんなんで、ほんまにええんかああああ！！！！

宗輔

え・・・それ、どっちのセリフ！？

フミ

本当にそれでいいの！？私は嫌だ！
いくら仕方がないって言われても、受け入れろって言われても、
やっぱり嫌なの！

みんなは違うの！？本当はまだまだ続けたいんじゃないの！？
ねえ！ねえ！ねえ！！

太夫 3

舞台の上で・・・取り乱すなんて・・・大人げない

宗輔

・・・大人げない・・・そうだな・・・
大人の態度で、無理やり受け入れようとしてたけど・・・
（ため息）ダメだ・・・

太夫3 何を言ってる!?

宗輔 フミちゃんの真っ直ぐな叫びが、(胸を押え)いろんなものを壊してくよ。
(大きく息を吸って) 俺も嫌だああああ!

フミ 宗輔さん……

宗輔 きつと……曾根崎心中ができた時も、それまでの伝統には収まらない、
こんな真っ直ぐなメッセージが、たくさんの人の心に突き刺さったんだ。
そうだよな?

フミ そう、それで若い人の間で心中がブームになって

宗輔 こまった幕府は、上演禁止のお触れまでだして。

フミ こんな舞台は不謹慎だーって。

二人 それが今じゃ伝統芸能。

宗輔 伝統を守ることは大事だ……だけど……続けていくには
破ってみることも必要なかもしれない。
それに……今日は人形たちが一番それを望んでる気がするよ。

二人、それぞれの人形を見つめる。

お初 きつと……大丈夫です。

徳兵衛 お初

お初 家も、仕事も、身分も、そういったもんを全部捨てても、胸の中の
熱いもんを守っていれば、きつと新しい道が開ける。そんな時代が来る。
うちの未来がそう言うてるような気がするんです。さあ。

徳兵衛、うなずき、お初の差し出した手をとる

太夫3 まて!ここは私の劇団、ここは私の舞台、私の守ってきたものを
お前らの好きにはさせない!

(太夫セリフを続ける)

この夜ばかりは長くあつてと願えども、無常に短い夏の夜。【夏の夜】
死をせまるように鳴く鳥の声。【鳥の声】(こども鳥の鳴き声)

徳兵衛 （空を見上げ）夜が明ける前に、ここを抜け出さんと。

太夫3 そういつて、たどり着いた曾根崎の森【曾根崎の森】

お初 あああ、いや！

徳兵衛 （一本の木の前。じっと木を見つめ）よし。（お初に）帯を

お初 徳兵衛さま？まさか・・・（やつぱり死ぬ気？）

徳兵衛 ここからは、お前と俺は一身同体。決して離れぬよう、帯で体をしっかりと結び付け・・・大阪の街を抜け出すで！

お初 はい！

帯を取り、二人、お互い自分の体に結び付ける

徳兵衛 よう締まったか？

お初 はい、締めました。

徳兵衛 さあ、行くで。

太夫3 動くな！お前たちの死に場所はここだ！
（袖の太夫に）おい、こいつらをおとなしくさせろ。

袖から、太夫1、2が登場。徳兵衛とお初にゆつくりと近付く。

徳兵衛 いかん、逃げるで。

駆け出す徳兵衛とお初。あわててその方向に回り込む太夫1

フミ 危ない！

フミと宗輔の遣いで、人形たち、間一髪方向を変えて太夫をかわす。
滑ってこける太夫1。

太夫3 何をやってる、そっちだ。早く捕まえんか。

しばらく、徳兵衛とお初と太夫1、2の追いかけあいが続く。

お初と徳兵衛も、床に足をとられコケそうになりながら、太夫をかわしていく。

フミ

（逃げながら）ねえ、待って！人形の声を聞いて。

お初と、徳兵衛が、必死に今日を変えようとしているの。

太夫1、2に挟まれて、中央の木の前に追い詰められる二人。

太夫3　よし、もう逃げられん。そのまま二人を木に縛り付けてしまえ！

フミ

お願い・・・

太夫1　（突然太夫口調で）と、そこへお初の客を乗せた駕籠がやってきた

太夫3　は？

太夫2　アホ！・・・もつと腹から声出せ。

（姿勢を正し）駕籠がやってきた

袖から慌てて駕籠が登場。駕籠にお初と徳兵衛が乗り込もうとする

太夫3　馬鹿な！お前らまで！？逃がすか！

駕籠を慌てて捕まえに行く太夫3。

その前に九平治が駆け込んでくる。半二もそれに無理やり引つ張られる。

九平治　（太夫3を止めるポーズで）待てい！ここから先はわしが行かせへん。

太夫3　え・・・お、おい・・・（半二に）どういうことだ！

九平治　たまには正義の味方をやってみたかった！

（半二を見て）だろ？

半二、驚いて、そして、その気になって

九平治　さあ、徳兵衛、お初、ここはわしに任せて、とつと逃げるんや！

これより先へは、あ、行かせねえええ（見栄をきる）

太夫2　（九平治の見栄に苦笑し）そうして駕籠は二人を載せて

太夫1 (太夫2にうながされ) あ・・・えつと・・・

光よりも早く飛び去った!

太夫1の言葉に、驚いて顔を見合わせる4人(宗輔、フミ、太夫1、太夫2)

宗輔 大丈夫、できると思えば、できる!

4人 (顔を見合わせうなずき) セーの、はあああああー! ! ! ! !

お初と徳兵衛を載せた駕籠を宗輔、フミ、太夫1、太夫2が抱えて退場。

太夫3 (木の前に崩れ落ち) あああ・・・無茶苦茶だ・・・

半二 あ・・・なんか・・・変な空気だから・・・とりあえず去りましょう

半二、九平治とともに退場しようとする

九平治 痛あああ!

急に動いたから・・・体が、痛うて・・・あああ、痛い痛い・・・

半二、九平治退場。

一人残され、木の前に座り込んだまま、茫然自失の太夫3

太夫3 (我に返り) ああ、その・・・なんというか・・・すみません!

(客席に頭を下げる)・・・今夜は我々の最後の舞台。来ていただいた皆様に、我々の集大成をお見せしようと思っていたのに・・・

もう・・・こんな無茶苦茶で・・・これで終わりだなんて・・・

何とお詫びをしいいか・・・(悔しさと申し訳なさで言葉に詰まる)

こどもたち、登場

スミちゃん ねえ、早く、最後、しめて

太夫3 え・・・

タキちゃん 太夫さんがしめてくれないと、私これ、たたけないよ

スミちゃん 義江ちゃん、いつも言ってるよね。

舞台は太夫の言葉ではじまって、太夫の言葉で終わる。

タキちゃん

途中でどんなに舞台がおかしくなっても、太夫が最後
きちんと締めれば、全てまーるく納めることができるって。

太夫3、舞台を見て、客席を見て、ゆつくりと自分のいつもの位置へ戻る

太夫3

（咳払い）こうして曾根崎の森の下、光よりも早く飛び去った
二人の姿は、誰が告げるともなく風にのつてうわさが広まり、
これより先の多くの人の、「新しい」恋の手本となりました。

太夫3、観客に深々と礼。

拍子木とともに暗転

暗転の中、スライド投影。タキちゃんとスミちやんで読み上げる。

スライド

こうして、この日お披露目された新しい演目、

曾根崎心中（全員で）破っ！

は、世間の評判となり、

お客様もどんどん増えて、

劇団がつぶれる話もなくなった、ということですよ。

めでたし、めでたし。